

ウブサラ付近は解氷が8,500年前、海侵から次第に陸化した部分は5,000年位前から現在にいたり(アイソスタシーによる隆起はなお年1cm弱の割で続いている)、全体が新しく生じた土地である。ミュンヘン付近は氷河末端部であるから、ヴィルムの極盛期直後(約2万年前)に解氷された。即ち両者は氷河地形ではあるが土地の生成に於いて新旧の相異がある。

メキシコにおける都市化

栗原尚子

第二次世界大戦後の低開発諸国において、都市人口の爆発的増加は、“都市化”の理論の再構築という視点から都市地理学の分野からも様々に取り扱われてきた。本報告では、それを生み出す構造を“低開発性”との関連で考察することを目的とした。

低開発国とくにラテンアメリカの国での都市人口の爆発的増加は、高い出生率に加えて農村から流入人口が大きな割合を占めている。メキシコ市においても同様で、従って雇用問題として農業構造とくに土地制度との関連から農村のPush factorの問題と、メキシコ市のPull factorとしての工業の集積などメキシコ市の性格を明らかにする視点からメキシコ市の都市化を考察した。メキシコ市の最卓越性(Primacia)は、1940年以降、10万人以上の都市の成長がめざましいにもかかわらず、メキシコの都市の階層性を考える際には最も重要である。1940年以降のメキシコ市の都市化は、年率5%の高率で進み(自然増加率は平均年率3%)、それ以前の時期と一線を画している。このような高率な人口増加の一因は農村からの流入人口に依っており、その農民の出身地は、メキシコ州をはじめとするメキシコ市周辺の伝統的農業の卓越する中央地帯が70%近くを占めている。これらの農村には、零細農や土地なき農民が潜在失業状態で滞留している。1940年以降のメキシコの近代化、産業化に伴ってメキシコ市の雇用機会の増大とともにこれらの農民は、よりよき生活を求めてメキシコ市に流入した。さらにメキシコ市のPull factorとしての性格には、工業の集積、植民地体制の遺構としての政治・行政部門の中央集権的体制や、商業機能などの独占的性格が加えられ、メキシコ市の都市化を特徴づけている。都市化によって生み出される問題には、マージナル階層の増加、スラムの拡大などメキシコの発展から取りのこされた部分の拡大、国内における南北問題の都市における問題として深刻さを増している。

今後の研究の方向さらに深化のためには、メキシコの社会構造およびメキシコの近代化の過程の詳細な分析と考察が必要であろう。

最後に、発表後のいろいろな質問、御指適に感謝いたします。今後の参考として役立たせていただきます。

発生論的手法によるアイスランドの地誌

浅井辰郎

この講演には4枚のB4プリントと62枚のアイスランドのスライドが用意された。まず1枚目で地誌を4分類し、その項目例、地理観、長所、短所などを比較した。4分類とは、羅列的地誌（百科辞典的、網羅的地誌）、構造的地誌（教科書的、説明的地誌）、発生論的地誌（系統的地誌）重点的地誌（集約的、分科的、目的的・応用的地誌）である。3番目にある本題の発生論的地誌とは自然史及び人類史に由来する地誌の意味で、アイスランドを例にとれば（プリント2）A「大西洋北部に位置すること」からは次のように展開する。

- I 大西洋中央海嶺が海面に現われた所→線状火口 g j á（ギャウ）→温泉→その利用。
 - II 東グリーンランド寒流とメキシコ湾流支流の遭遇域であり、かつ高緯度のため表層水の冬季冷却が起す対流により栄養塩の上昇が盛→豊かな漁場→水産業はアイスランド収入の8割以上→領海50海里に1972年9月拡大→タラ戦争。
 - III 年中存在するアイスランド低気圧→南・東風の卓越→緯度の割に温和な気候、しかし夏も要暖房、温量指数は根室の半分の22→酪農業が主→労力の大きな農業→どうして高い文化が？歴史時代の気候変化→黄金時代と暗黒時代。
 - IV ワシントン=モスコーの中間点→米ソ戦略上の重点→ケブラヴィーク飛行場はNATO軍基地に→その収入も大切な歳入らしい。
- またB「ゲルマン系のほぼ単一民族国家」という歴史から次の展開が考えられる。
- V 個人的には自主・平等（例、フラフンケルのサガ）→アイスランドへ集団移住→合議制のアルシク（国会）設立。
 - VI 社会的には共同体形成→民族愛・国語愛→協同組合（生産・消費・教育・救難）